

教育実践報告：準正課教育プログラムにおける遠隔授業実践の試み

村田 晋也¹⁾，仲道 雅輝¹⁾，浅田 隼平²⁾

1) 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

2) 愛媛大学教育学生支援部

An Attempt to Practice Remote Classes in Co-curriculum Program

Shinya MURATA¹⁾, Masaki NAKAMICHI¹⁾ and Shumpei ASADA²⁾

1) Office for Educational Planning and Research, Institute for Education and Student Support, Ehime University

2) Education and Student Support Department, Ehime University

1. はじめに

令和2年10月現在，新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は，洋の東西を問わず人々の生活に多大な影響を及ぼし続けている。諸報道が取り上げるように，その感染拡大は我が国の高等教育機関にも，またそこで学ぶ大学生らにもこれまでと異なる対応を強いる結果となっている。そこで奉職する我々教職員には，このような困難な状況にあっても，合理的な範囲で可能な限り学生の学びを最大化するための方策を講じる責任が課されていることは言うまでもない。

他の高等教育機関と類して，愛媛大学でも令和2年4月以降，「新型コロナウイルス感染症に対する教育活動BCP(Business Continuity Plan)」をはじめ，教育や研究，実務ほか大学における諸活動の継続に関する方針が順次教職員に報知された。4月中旬にはBCPが，最も厳しい「レッドステージ」に引き上げられ，原則として全ての学生の登校を禁止し，遠隔授業のみを実施することが定められるとともに，教職員も学内施設(実験室・ゼミ室・共同利用施設等)の使用が禁止され，多くのスタッフが在宅でのリモートワークによる勤務となった。

状況が日々刻々と変化し，臨機応変の対応が求められる中で，授業運営についても多様な調整を施す必要が生じたが，中でも本稿は愛媛大学が「準正課教育」の一つとして位置付ける「愛媛大学リーダーズ・スクール(Ehime University Leaders School: ELSと略記)」の取り組みに

スポットを当てるものである。本来，対面による受講生と教員とのインタラクティブな授業や，ディスカッション，グループワーク等から得られる受講生同士のコミュニケーション，少人数教育による細やかなフィードバックやリフレクション等により，リーダーシップを中心とした学生の汎用的能力の養成を主目的とする教育プログラムにおいて，如何様な“コロナ対応”が求められたのか，また何が課題となり，どのように解決を図ることが出来たのか等について整理することにより，将来，斯かる事態に直面した際の一参考例となることを願うものである。なお，コロナ禍における種々の対応や調整について詳述するに先立ち，まずELSの概要を紹介するところから筆を始めたい。

2. 「愛媛大学リーダーズ・スクール」の概要

平成17年3月，愛媛大学は教育・研究・地域連携・国際連携において様々な意欲的取り組みを行う上での基本指針として「愛媛大学憲章」を定め，それにおいて「自ら学び，考え，実践する能力と時代を担う誇りをもつ人間性豊かな人材を社会に輩出すること」を最大の使命として掲げた(愛媛大学教育・学生支援機構，2012)。さらに平成28年4月には同憲章を一部改訂し，地域の発展を牽引する人材，グローバルな視野で社会に貢献する人材の育成を主要な責務として自覚すること，教育においては「正課教育，準正課教育，正課外活動」を通してこれらに臨むことを標榜した(愛媛大学HPより)。

表1 愛大学生コンピテンシー

| |
|---|
| I 知識や技能を適切に運用する能力 |
| 1. 必要な情報を収集・整理できる |
| 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる |
| 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる |
| II 論理的に思考し判断する能力 |
| 4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる |
| 5. 客観的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる |
| III 多様な人とコミュニケーションする能力 |
| 6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる |
| 7. 目的達成のために多様な人と協働できる |
| IV 自立した個人として生きていく能力 |
| 8. 自らの個性や適性を活かして行動できる |
| 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる |
| V 組織や社会の一員として生きていく能力 |
| 10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる |
| 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる |
| 12. 地域や国内外の課題を自ら考察し、解決に向けて行動できる |

(出典：愛媛大学教育・学生支援機構，2018)

「愛媛大学憲章」の精神を踏まえ、愛媛大学生が大学生として目指すべき方向を示したものが、平成24年7月、教育研究評議会において定められた「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」である（松本，2013）。学生が卒業時に身につけていることが期待される能力（育成したい学生像）として5つの能力と12の具体的な力を示した「愛大学生コンピテンシー」（表1参照）は、「正課教育だけでなく、準正課教育及び正課外活動も含めた大学生生活全体の活動を包括して設定」されたものである（松本，2013）。即ち、「卒業するために必要な正課の授業や研究活動（正課教育）」だけではなく、サークル活動やボランティア、留学、下級生への学修支援等、正課教育以外にも学生が人間として成長する機会は多様に存在すると捉え（愛媛大学教育・学生支援機構，2018）、学生の能力育成のステージを「正課教育」「準正課教育」「正課外活動」の三つに分類したこととなる（村田ほか，2015）。

これら3ステージのうち、愛媛大学の特色ある教育の一翼を担う「準正課教育」とは、「卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動」と定義される（愛媛大学HPより）。考えて

みれば、大学教職員は学生に対して「（狭義の）正課教育」でもなくかといって「正課外活動」でもない、両者の中間的な位置を占める場面で様々な学びの場を提供しているが（村田ほか，2015）、愛媛大学ではこれらを「準正課教育（co-curricula）」と呼称し、その特徴を(1)正課教育に比して学生の主体性のウェイトがより大きいこと、(2)教職員が活動内容に責任をもって関与し、適切な指導を行っていることとしている（松本，2013）。ただし、正課教育との境界は必ずしも固定的なものではなく、大学全体や各学部等の教育戦略に基づいて、準正課教育から正課教育に組み込まれるものもある。他方、正課外活動との境界も同様であり、それゆえに「大学が教育戦略と教育的意図に基づいて公式に設けているものが準正課教育、これに対して、学生の純粋に自発的な行動によって成立し、それを大学が公認しているものが正課外活動」であるとして一応の境界線を設けているものである（松本，2013）。

本稿が扱うELSは「準正課教育」を代表する取り組みの一つである。平成19年度より文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択され（補助金事業は平成22年度3月末で終了）、学生リーダーや将来リーダーになり得る学生を支援・教育することで、人間的な成長の促進、他の学生を率いることによる大学の活性化、社会におけるリーダーシップ発揮による社会貢献を目指すELSは、「正課授業、ゼミナール、課題セミナーや学生主導のプロジェクトから成る複合型プログラム」¹としてこれまで14年にわたり開講されている（愛媛大学教育・学生支援機構，2012）。

以下、本稿では、同プログラムの主要な部分を占める「ELSゼミナール」に焦点を当てて記述を進める。例年、前期（4月～8月）に開講する「ELSゼミナール」は、150分×14回の授業と1泊2日の合宿型研修により構成される。受講生らは、リーダーシップに関する知識・スキル・マインドについて学ぶことを目的とし、リーダーシップの理論研究に関する講義を受けたり、自己とリーダーシップの関わりを理解することを狙いとしてこれまでの歩みを振り返るワークに取り組んだり、「自らが最も気になるリーダーとしての素養を選択し、その素養について調査・研究を行い」、他の受講生に対して実施するセミナー等に取り組む（愛媛大学教育・学生支援機構，2012）。加えて、自分たちの学習活動について個人で振り返ったり、受講生同士でピア・リフレクションを行ったり、教職員からのフィー

¹ 学生主導のプロジェクトとしては、日本と台湾の大学生が共に四国各地を自転車で走破し、地域資源の再発見と国際交流を目的とした「環四国サイクリング・プロジェクト」や、大学間連携共同教育推進事業「西日本学生リーダーズ・スクール」*の一環として愛媛大学/岡山理科大学が共催する「学生リーダーズ・サマースクール」の企画・運営プロジェクトなどが代表的なものとして挙げられる。

*西日本学生リーダーズ・スクール（UNGL）：愛媛大学リーダーズ・スクール（ELS）の取り組みやノウハウの敷衍を目的として発足した大学間連携事業。平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択された（事業名：西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム（University Network for Global Leadership Development in West Japan））。発足当時10の高等教育機関（大学・短期大学）により構成されていたが、令和2年現在、連携校は20を数える。

表2 ELSの授業コンテンツ例

| | |
|------|--|
| 第1回 | 開校式、ガイダンス、アイスブレイク、チーム・ビルディング |
| 第2回 | リーダーシップ方法論①フィードバックとリフレクション |
| 第3回 | リーダーズ・スキルアップ・セミナー①コミュニケーションの技術 |
| 第4回 | リーダーズ・スキルアップ・セミナー②プレゼンテーションの技法 |
| 第5回 | リーダーズ・スキルアップ・セミナー③企画立案入門 |
| 第6回 | リーダーシップ方法論②目標達成の手法 ；インストラクショナル・デザイン |
| 第7回 | リーダーズ合宿研修 |
| 第8回 | 合宿研修のリフレクション |
| 第9回 | リーダーシップの実践と理論の関わり |
| 第10回 | リーダーシップの開発手法 |
| 第11回 | リーダーズ・トップ・セミナー：ゲストスピーカーによる講演 |
| 第12回 | 学生リーダーズ・セミナー① |
| 第13回 | 学生リーダーズ・セミナー② |
| 第14回 | 学生リーダーズ・セミナー③ |
| 第15回 | 全体リフレクション、閉校式 |

ドバックを受ける等により学びを深めていく（具体的な授業内容については表2を参照）。

令和2年現在、教育・学生支援機構教育企画室に在籍する2名の教員が教育学生支援部教育企画課の職員のサポートを受けつつ共通教育発展科目として開講する「ELSゼミナール」（科目名称「愛媛大学リーダーズ・スクール」）は、その発足より24期・490名以上の受講を数えるまでに至っている²。これに加えて、（本稿が主眼とするところと異なるため詳述は避けるが）ELSでは共通教育発展科目「愛媛大学リーダーズスクールに関する科目」として、上述「ELSゼミナール」の発展的・応用的内容を扱う「ファシリテーションとリーダーシップ」、海外で行われる10日間程度のリーダーシップ・プログラムへの参加を含む実習科目「グローバル・リーダーシップⅠ」³及び「グローバル・リーダーシップⅡ」⁴を開講しており、「ELSゼミナール」も含めこれらの科目はいずれも全学部・全学年の愛媛大学生が受講可能である。開講に際しては修学支援システムを使

用したメールによるアナウンスに加え、こと「ELSゼミナール」においては、各学部の初年次必修科目「新入生セミナーA」等の授業前後での案内や、ホームページやSNSを通じたPR活動により受講生を募っている（これら次期生募集の多くは、実践的な学びを得るELSの総合的な活動の一環として過年度の「ELSゼミナール」受講生が担当している）。

さてここまで、ELSの全体像と平時の諸活動について概観してきたが、次項では、コロナ禍において求められた対応について詳述を試みる。

3. 令和2年度の対応

令和2年2月下旬、UNGLの研修プログラム「リーダーシップ・チャレンジ in サイパン」の引率で海外に赴いたELS担当教員らは、新型コロナウイルス感染症に関する報道が我が国において急速に増加する様子を目の当たりにし、続く令和2年度、「ELSゼミナール（第24期）」及び関連科目群の種々の授業を通常通り開講することが可能かどうかについて強く懸念し始めたことを記憶している。

同年3月30日、愛媛大学は令和2年度前学期の授業開始日を4月22日とする（即ち、同月8日から21日の2週間を休講とする）旨を定め、次いで、感染の状況を4ステージ（レッド／オレンジ／イエロー／グリーン）に区分し、ステージ毎に授業の実施方針を定めた「新型コロナウイルス感染症に対する教育活動BCP（Business Continuity Plan）」を全学に施行した。4月10日には一旦「イエロー（遠隔授業を積極的に実施する。ただし、感染防御に配慮しつつ対面型授業も実施することが出来る）」と判断されたBCPステージは、その後、政府の緊急事態宣言、愛媛県知事による外出自粛要請等を受け、4月17日には「レッド（原則として、全ての学生の登校を禁止する。遠隔授業のみを実施する）」ステージへ引き上げられることとなった。

これらを受け、ELSの運営に携わる教職員ら（以下ELSスタッフと略記）は、遠隔で授業を実施するのか、将又暫く開講を見送るのか、後者であればいつまで開講時

²平成28年度まで「ELSゼミナール」は年間2クラス（前期／後期）を開講していたが（例：平成28年度前期：第19期、同後期：第20期）、発展的な科目の新規開講を含むELSプログラム全体の充実と学びの深化を目的とした調整の一環として、平成29年度より年間1クラスを開講している（例：平成29年度前期：第21期、平成30年度前期：第22期）。同年度以降、後期には共通教育発展科目リーダーズスクール科目群に「ファシリテーションとリーダーシップ（EFLと略記）」を新たに設置し、「ELSゼミナール」で学んだ知識・スキル・マインドを実践的に体得する機会の創出に努めている。就中、学内外諸機関との連携プロジェクトの企画・実施・リフレクションを通して受講生たちは実社会との連携から学びを深めていく様子が観察されており、これまでに3期・23名が当EFLを受講修了、第4期生20名が受講中である（令和2年10月現在）。

³大学間連携共同教育推進事業「西日本学生リーダーズ・スクール（UNGL）」が実施する国際交流型リーダーシップ研修「リーダーシップ・チャレンジ in 台湾（於 国立高雄科技大学・台湾）」への参加を含む。

⁴UNGLが北マリアナ諸島の公立学校機構（CNMI Public School System）管轄下の小中学校にて実施する国際交流型リーダーシップ研修「リーダーシップ・チャレンジ in サイパン」への参加を含む。

期を先送りするのか等の判断を迫られることとなった。4月初旬、第1クォーター（4月22日から6月10日までの期間）には遠隔授業のみを実施するとの方針を受け、ELSスタッフらは同期間「ELSゼミナール」の開講を見送ることを決定し、第2クォーターからの対面授業再開を視野に、短期間に集約した「ELSゼミナール」の開講について検討を開始した。開講を先送りする決定の背景となったのは、「ELSゼミナール」における教育の特徴について、次のような点が懸念されたことである。

- グループワークやディスカッション等、所謂アクティブ・ラーニングの手法を多数活用する「ELSゼミナール」を、同期型・非同期型の遠隔授業でどこまで実施できるか
- 学生間のピア・リフレクションや教職員からのフィードバック等によって学びを深めていくという「ELSゼミナール」の強みは、遠隔のみの授業でも活かすことができるか

このような課題があることも踏まえ、積極的に開講時期を遅らせるとの決定を下すことにより、懸案事項を技術的に解決する方法について考慮したり、代替的なアイデアを検討したりするための時間が得られた。また、これらの決定をもとに、プロジェクト活動として次期生募集に取り組む過年度生のチームメンバーとオンライン会議システム（Zoom）を用いてミーティングを行い、第2クォーターからの開講を見据えた受講説明会の企画や募集活動の実施が計画された。例年と比して、コロナ禍においてできることは限られていたものの、学生チームはプロモーション動画のYouTube上での公開、ポスターやパンフレットのELS公式ウェブサイトへの掲載等を企画し、早速その作成に取り掛かった。

在宅でのテレワークが続く中、4月末には、第2クォーター以降にどのような形態でELSを開講できるかが不透明であること、また各所属機関において“コロナ対応”に追われていること等を背景に、当初予定していた4名のゲスト講師全員の招聘を見送ることとした。

5月12日、ELSスタッフらは再びZoomで遠隔ミーティングを行い、今後の方向性として、①可能であれば対面授業と遠隔授業（同期型・非同期型）を併用して授業を行うこと、ただし、②5月14日の政府発表及びそれを受けて発出される愛媛大学の方針に基づいて令和2年度のELS開講方法を決定することを確認した。

その後、5月18日に発出された「令和2年度前学期の授業開講方針」では、コロナウイルス感染拡大状況が流動的で、先が見通せないこと、地域への責任として愛媛大学を感染の発生源にしないこと、従って、学生、大学院生、教職員の安全を確保し、授業を通じた感染者やクラスター感染の発生の回避を最優先にすべきことを根拠に、第2クォーター期間開始日（6月11日）以降も、遠隔授

業の実施を原則とすることが示された。併せて、ZoomやMicrosoft Teams等を用いた同期（リアルタイム）型ないしLMS（Learning Management System：愛媛大学ではMoodleを採用）やMicrosoft Stream、同OneDrive、YouTube等を用いた動画等のネット配信による非同期（蓄積）型の遠隔授業や、修学支援システム等のメールにより課題を与え、指導を行うこと等により、不慣れで環境が不十分という状況の中でも遠隔授業の質向上に努めることが勧奨された。

この決定を受け、ELSスタッフらは同期型・非同期型の併用による授業実施案について協議し、以下の方法で「ELSゼミナール」を開講することとした。即ち、(i) 同期型・非同期型を併用して授業を構成し、これにより例年の半分の期間での開講であっても、コンテンツ面では可能な限り通常通りの「ELSゼミナール」の内容を網羅すること、(ii) 同期型ではZoom、非同期型ではLMS（Moodle）をそれぞれツールとして使用すること、(iii) 映像教材の使用や質疑応答フォームの設置等により非同期型でも学生フレンドリーな学習環境の提供に努めること、(iv) 上記に加えてメールやLINE等のコミュニケーションツールを用いた学生へのフォロー体制の構築がそれである。以下、3点に分けて具体的な授業実施方法を紹介する。

(1) 同期型・非同期型を併用した授業構成

基礎的知識の習得を目的とした内容（主に経営学・心理学領域での理論研究の変遷やそこから導き出されるリーダーシップの定義等に関する講義）については、ELS担当教員による講義動画を視聴する非同期型で授業を実施した。他方、リーダーシップに関連するスキルやマインド（自己・他者理解の変化や深化、インストラクショナル・デザイン、プレゼンテーションのスキルなど）に関する内容は、グループやペアでの活動、教員とのインタラクティブなやり取りなどが不可欠であるとの認識から、同期型での授業実施を選択した（同期型・非同期型で実施したコンテンツ内容は表3を参照）。

(2) 同期型授業におけるZoomの活用

同期型授業では、オンライン会議システムZoomにある多様な機能を活用することで、受講生-教員間、また受講生間のインタラクティブなコミュニケーションが確保されるよう心がけた。以下はその例である。

- 「画面共有」機能を用いて、スライドを表示しつつ講義を実施。
- 学生の受講の様子を確認しつつ授業を進めるため、カメラONでの参加を原則とし、随時「意思表示アイコン」⁵を使用できる旨をアナウンス。
- 学生同士が学習内容を確認したり、自分の意見を述べたり、互いの取り組みに対するコメントやフィード

表3 令和2年度前期（第2クォーター）の「ELSゼミナール」コンテンツ内容

| 同期型（Zoom 使用） | 非同期型（Moodle 使用） |
|--|---|
| 開講式／ガイダンス チーム・ビルディングとリーダーシップ リーダーシップの基礎知識 ①リーダーシップの定義 ②自己理解，リーダーシップ・スタイル リーダーシップの応用と実践 ①目標達成の手法 ②影響力の法則 ③人間関係を築く選択理論 ④インストラクショナル・デザイン リーダーシップに関する実際的なスキル ①プレゼンテーションの技法 ②プレゼンのコンサルテーション 学生によるグループ・プレゼンテーション 最終講義：リーダーシップとは何か 修了式 | 講義動画 ・リーダーシップは身近なもの ・組織とは何か ・リーダーシップ理論研究の歴史の変遷①-④ ・サーバント・リーダーシップ 課題 ・毎回の授業後，設問に対する回答や授業の感想，学んだ点・気づいた点などを「フォーラム」に投稿 ・他の学生の「フォーラム」投稿にコメントを付記 ・自己の歩みを振り返る「自分史」の作成・提出 ・グループ・プレゼンテーション評価シートの提出 ・ELSゼミナールにおける学びと今後のビジョンについて纏めた最終レポートの提出 |

バックを伝えあったりするため、「ブレイクアウトルーム」⁶機能を活用してペア／グループワークを実施。

- 同期型授業の実施時，随時学生からのコメントや質問を受け付けたり，講義資料を配布したりするために「チャット」⁷機能を活用。

(3) 非同期型授業における Moodle の活用

非同期型授業では，Moodle の諸機能を次の通り用いることで，受講生の学びを促すとともに，やはり受講生-教員間，受講生間のコミュニケーションの促進に努めた。各コンテンツには学修推奨期間を設定し，同期型授業とペースを合わせてeラーニング受講を進めることができるようアナウンスした。

- 動画教材として講義動画を YouTube にアップロードし，限定公開リンクを Moodle に掲載。受講生が動画

を止めてメモを取ったり，再度見返したりすることができるようにした。

- 「フォーラム」⁸機能を使用して課題を設定し，上記動画教材の視聴後，学んだことや気づいたこと，日常への応用・適用についてコメントを求めた。単に教員へ課題を送信するのではなく，学生間で互いにフィードバックできるような設定とし，他者の得た学びからさらに気づきを得ることができるよう工夫した。
- 同期型授業で使用した講義資料（ハンドアウト，ワークシート等）や参考資料，参考動画へのリンク等を掲載し，自主的に学びを深めることを希望する学生のニーズに備えた。

これらに加えて，「ELSゼミナール」では授業時間外に受講生一人ひとりと Zoom による個別面談（学生1人あたり30-60分程度）を実施した。これにより，受講生らのニ-

⁵ ミーティングへの参加者が「挙手／拍手／サムズアップ」その他，自分の意思を簡潔に表すことのできるアイコンを表示できる機能。ユーザーがこの機能を選択・押下すると数秒間アイコンが表示され，他の参加者がそれを確認できる。

⁶ Zoom ミーティングを最大で50の別々のセッションに分割できる機能。ミーティングを主催するホストは，ミーティングの参加者を，これら別々のセッションへ自動的にまたは手動で分割することができる（Zoom ヘルプセンター HP より一部引用）。従って，グループ分けの際には，Zoom によるランダムな割り振りとすることも，ホストとなる教職員が意図的にメンバーを組み合わせたグループを作成することも可能。なおホスト・共同ホストはどのブレイクアウトルームにも入退室が可能であり，各ペアないしグループのディスカッションの進捗状況等を確認することができる。またブレイクアウトルームを閉じるまでの時間を分・秒単位で設定することもでき，これにより参加者は一定時間経過後，メインセッションに自動的に戻される。

⁷ ミーティング内チャットでは，ミーティング内の他のユーザーにチャットメッセージを送ることができ，特定の個人にプライベートメッセージを送ることも，グループ全体にメッセージを送ることも可能（Zoom ヘルプセンター HP より）。ホストは誰がチャットに参加するかを選択することも，全体でのチャット使用を無効にすることもできる。従って，教職員間のみでやりとりすることもできれば，受講生全員にアナウンスや問いかけを行うことや，質問を受け付ける等も可能となる。

⁸ Moodle の機能の一つで，これを用いて教員が学生からの授業に関する質問を受け付けたり，学生同士のディスカッションの場として使用したりすることができる。特定のテーマについて複数の学生が意見や感想を書き込むことができ，これにより意見の交換や情報共有を図ることができる（愛媛大学教育デザイン室，2017）。

ズに合わせて一部コンテンツをカスタマイズしたり、履修に不具合・不都合がないかを確認したり、学びをフォローアップしたりすること等が可能となった。また、受講生らを5人ずつのチームに編成し、グループでプレゼンテーション（リーダーシップに関連する諸々のスキルや能力について他の受講生に講義するセミナー）を企画・作成する課題も設けた。これにより、受講生間での共同作業を通じたコミュニケーションや実践的なリーダーシップ発揮の機会を設け、授業時間外での学習や学びの深化を促した。

上記までの諸対応はいずれも、文部科学省が「メディア授業告示（平成13年文部科学省告示第51号）」に示す、多様なメディアを高度に利用した授業の要件、即ち、「一 同時かつ双方向に行われるものであって、かつ、授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所において履修させるもの」であるか、もしくは「二 毎回の授業の実施に当たって、指導補助者が教室等以外の場所において学生等に対面することにより、又は当該授業を行う教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後すみやかにインターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの」であるとする要件（文部科学省、2018）を念頭に企図したものである。また、令和2年4月、文部科学省高等教育局大学振興課が発表した「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ & A」にて示された、面接授業に相当する教育効果を担保しようとする遠隔授業に必要な要素、即ち「①設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導と②学生の意見の交換の機会」（文部科学省、2020）を確保しようと努めた結果であることも付言する。

ここまで令和2年度、コロナ禍における「ELSゼミナール」の運営について解説を試みた。次いで、当該授業を受講した学生たちを対象としたアンケート調査の結果に目を向けた。

4. 受講後のアンケート結果

オンラインのみでの実施となった「ELSゼミナール（第24期）」の終了後、受講生23名を対象にアンケートを実施し、うち17名から回答を得た（回答率73.9%）。回答に先立ち、アンケート実施の目的をプログラム改善や効果検証のためとし、回答が成績評価に影響するものではないこと、回答は学生の自由意志に基づくものであること、集計したデータを学協会での報告や論文・著書等の作成に使用する可能性があることを説明し、同意と了承を得た。回答者の所属学部は、法文学部2名、教育学部4名、社会共創学部5名、医学部1名、理学部2名、農学部1名、工学部1名であった。学年については17名中13名が1回生、次

いで2回生1名、3回生2名、4回生以上が1名であった。アンケートの主な設問項目とそれに対する回答は以下の通りであった。

- ELSゼミナールの受講はリーダーシップに関する自分の見方・考え方に影響を与えたか：5つの選択肢（大きく影響した／影響した／どちらとも言えない／あまり影響しなかった／全く影響しなかった）からの択一で回答を求めた結果、「大きく影響した（52.9%）」「影響した（47.1%）」と全員が肯定的に回答。
- 教職員からの指導やフィードバックは自分のリーダーシップの養成・伸長に役立ったと感じるか：5つの選択肢（とても役に立った／役に立った／どちらとも言えない／あまり役に立たなかった／全く役に立たなかった）から択一で回答を求めた結果、「とても役に立った（41.2%）」「役に立った（52.9%）」「どちらとも言えない（5.9%）」と大方の学生が肯定的に回答。
- 受講生同士のコメントやフィードバックは自分のリーダーシップの養成・伸長に役立ったと感じるか：前述と同様の5つの選択肢から択一で回答を求めた結果、「とても役に立った（64.7%）」「役に立った（29.4%）」「どちらとも言えない（5.9%）」と大半の学生が肯定的に回答。
- ELSゼミナールの受講は全体として満足のいくものだったか：5つの選択肢（とても満足した／満足した／どちらとも言えない／あまり満足できなかった／全く満足できなかった）から択一で回答を求めた結果、「とても満足した（58.8%）」「満足した（41.2%）」と回答者全員が肯定的に回答。

これらの回答結果から、(a)教職員とのやり取り及び受講生同士のピア・コミュニケーションのいずれもリーダーシップに関する学びを促進したこと、就中、(b)他の受講生から得られた学びが高く評価されており、(同期型・非同期型のいずれにおいても)互いにコメントやフィードバックを伝え合う機会の創出が功を奏したこと、以上のことから、(c)初のオンライン開講というチャレンジングな状況下でもリーダーシップに関する学びを一定程度得る機会を受講生に提供できたであろうことが推察される。

これを裏付けるかのように、アンケートの自由記述項目には次のような意見が寄せられた。代表的なものを以下に抜書する。

(得られた学びについて)

- 知識としての学びだけではなく、毎授業のグループワーク…(中略)…発表など、実践の場が多くあった。そこで他人のリーダーシップに触れたり、自分のリーダーシップについて見つめ直したりすることが出来た
- リーダーシップは限られた人にしか発揮できないように堅苦しく捉えていたが、誰もが普段の生活から発揮しているととても身近なものだと実感できた

- 自分はリーダーシップを比較的持っている方だと思っていたが、自分にはまだまだ足りていないことばかりだと実感させられた

(教職員からの指導やフィードバックについて)

- 自分では気付けない部分を指摘してもらえたり、気付かされるが多かった…(中略)…自分がダメだと思ったところも見方を変えれば良さにもなるという風を感じた
- 良い意見に対してはしっかりと褒めて下さったので、安心して発言できた。また課題のある箇所は指摘してくださることで、素早く直したり改善することができた

(他の受講生からのコメントやフィードバックについて)

- 一定期間共に同じ目標に向かい、議論してきたメンバー間からの自分への反省・評価、活動全体に対しての反省・評価はとても有意義なものだった
- Zoom だけという限定的な付き合いのなか、ELS での課題や自分の性格面に至るまで駄目なところは駄目と言ってくれる仲間がたくさんいてくれました
- 短所や長所についても今まであまり言われたことのないようなことまで気づかせてくれた
- 相手に遠慮することなく、思ったことを言うてくれる人が多かったので、正直な意見をたくさん聞くことができた

上記に加えて、当該アンケートでは、オンラインでの開講という授業実施形態についても率直にコメントするよう求めた。受講生らの記述内容からは、「ELSゼミナール」に留まらず、遠隔での実施が主となった令和2年度前学期の授業運営について有益な示唆を得られるものと思われる。そのうち代表的なものを否定的な意見と肯定的な意見に分けて以下に抜粋する。なお、同一学生からの回答も否定的／肯定的意見に分節して記述する。

(否定的な意見)

- Zoom では、表情が分かりにくかったり、会話の間を掴みにくかったりなどオンライン独特のデメリットがあり、ELSを受講し始めてすぐの頃はお互い知らないメンバーからのスタートだったので、スムーズなコミュニケーションが難しかった
- 誰かが喋っているときは自分は絶対に喋らないという緊張した空気感があって、活発な意見交換や会話がしにくかった
- 休憩の間に色々な話が出来なかったの中で(執筆者注：仲?)の深まりは対面より苦勞した
- 画面に向かって話している分、距離を掴むのが難しかった
- 正直対面で受講したかったという思いが強い。対面であればもっと早く、全員と仲良くなれたのではないかと思う

(肯定的な意見)

- いつでも気軽にミーティングすることが出来、ミーティング回数やコミュニケーションの場の回数としては対面より多く設けられたと思う
- 自室で周りに自分しかいないという環境下での授業や企画進行は、とても喋りやすくてよかった
- 対面で会うことの大切さやオンラインでのコミュニケーションの取り方について考える良い機会になった
- 人間関係を構築することに…(中略)…は苦勞したが、実社会において今後オンラインでやり取りをすることは増えていくと思っているため、必要な苦勞であったと思う
- オンラインでの実施にも関わらずこれだけ意見を言い合える関係になれたという経験は、これからの自分にとって大きな財産になるのではないかと考えている

5. 結びに代えて

本稿では、2020年度前半の「ELSゼミナール」の運営に求められた種々の調整を振り返り、次いで同授業をオンラインにて受講した学生らからのアンケート回答について確認してきた。最後に執筆者らが実践の中で感じた課題と今後の展望について記して結びに代えたい。

Moodle等をはじめとするLMSはもちろん、ZoomやWebexなどのオンライン会議システム、映像による講義提供に使用可能なMicrosoft StreamやYouTube、講義資料等の共有・配布や共同作業に利便性の高いMicrosoft OneDriveやDropbox、またこれらを包含するMicrosoft TeamsやSlack等のコミュニケーション・ツールは、学習・教育支援に有用であるとして急速に脚光を浴びるようになった。これらの利用が効果的・効率的な授業運営に資することについて、執筆者らはこの度の経験から感じ取ることが出来たが、所謂“デジタル・ネイティブ”である現役の学生たちですら、これらの利用方法を把握し活用するには時間と労力を要したようである。これらのことは、授業を提供する教員側には、自分の授業の特性や受講生に生じる効果と負担、導入に伴うメリットやリスク等を鑑み、これらのうち何を活用するのかを検討するための基礎的知識と選択眼が今まで以上に求められることを示唆するものとなる。コロナ禍において必要に迫られる形で導入された種々のツールも、“ポストコロナ”においては教育のインフラストラクチャーの一部として一層認識されることは予想に難くないからである。

「ELSゼミナール」では、これまでもMoodleを通じeラーニングのコンテンツを受講生らに提供してきた。とはいえ、その活用は、授業資料の配布や課題の提出フォームを設ける等、補助的・限定的な使用に留まっていた。しかしながら、この度の経験はMoodleを活用した映像教材の提供、

「フォーラム」機能を用いた受講生間のディスカッション等が学生の学びを活性化する可能性を我々に再認識させるものとなった。また、同期型として Zoom で実施した授業時には、受講生らが集中して授業に臨む様子（カメラ ON 時）や、チャット機能の使用如何を問わず発言や質問が出易い様子も観察された。これらのことから、(勿論、授業の特性や目的・目標にもよるが) 遠隔授業と対面授業を適切に組み合わせたブレンディド授業の有用性についても新たな示唆を得ることが出来たように思う。

本稿では、学生の汎用的能力（主にリーダーシップとそれに関連するスキルやマインド）を養成する「準正課教育」における遠隔授業の一実践事例について整理を試みた。この度、緊急的措置として実施することとなった遠隔授業であったが、一定の教育成果を上げることが出来たと実感している。とはいえ、「愛大学生コンピテンシー」にある様々な能力は、視覚・聴覚によるコミュニケーションを主とするオンラインでの授業実施のみで養成することは困難であり、非言語コミュニケーションを含む対面での授業実施が望まれるのもまた事実である。これを遠隔での授業開講の中でどれほど担保していくことができるのかについては継続的に検討すべき課題と言えよう。執筆者らは、対面授業時にもアンケートを実施し、その結果との比較によって学習成果の差異を検証することについてもその必要性を認識している。

いつまでイレギュラーな“コロナ対応”が求められるかについては未だ不透明だが、どのような状況にあらうとも、「学生中心の大学」を標榜する愛媛大学の教職員の一人として、学生の豊かな学びを支える教育プログラムの提供に今後とも碎身する所存である。

参考文献

- 愛媛大学「令和2年度入学案内」<https://www.ehime-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/03/R2nyugakuannai-1.pdf> (アクセス日: 2020年10月9日)
- 愛媛大学「大学案内/愛媛大学憲章」<https://www.ehime-u.ac.jp/overview/about/charter/> (アクセス日: 2020年10月9日)
- 愛媛大学「大学生活/準正課教育」https://www.ehime-u.ac.jp/campus_life/ex-study/ (アクセス日: 2020年10月10日)
- 愛媛大学「第2クォーター期間開始後の授業について(6月19日)」<https://www.ehime-u.ac.jp/post-122368/> (アクセス日: 2020年10月11日)
- 愛媛大学教育・学生支援機構(2012)『愛媛大学 教育改革の歩み』愛媛大学教育・学生支援機構。
- 愛媛大学教育・学生支援機構(2018)「愛媛大学学生として期待される能力:愛大学生コンピテンシーパンフレット」愛媛大学教育・学生支援機構。
- 愛媛大学教育デザイン室(2017)『moodle 教職員向け利用ガイド Ver.3』愛媛大学教育デザイン室(参照: http://moodle.ehime-u.ac.jp/pdf/guide_tch_ver3.pdf; アクセス日: 2020年10月13日)
- 松本長彦(2013)「「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」を解説する(試論)」『大学教育実践ジャーナル』愛媛大学教育・学生支援機構, 第11号, 1-10頁。
- 村田晋也・小林直人(2015)「正課教育, 準正課教育, 正課外活動:「愛大学生コンピテンシー」の育成のために」『大学時報』日本私立大学連盟, 第364号, 42-47頁。
- Zoom ヘルプセンター「ブレイクアウトルーム入門」<https://support.zoom.us/hc/ja/articles/206476093> (アクセス日: 2020年10月13日)
- Zoom ヘルプセンター「ミーティング内チャット」<https://support.zoom.us/hc/ja/articles/203650445> (アクセス日: 2020年10月13日)
- 文部科学省 制度・教育改革ワーキンググループ(第18回) 配布資料「資料6 大学における多様なメディアを高度に利用した授業について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryu/_icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_6.pdf (アクセス日: 2020年10月2日)
- 文部科学省 高等教育局大学振興課「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係るQ & A(令和2年4月1日)」https://teleinfo.yokohama-cu.ac.jp/files/pdf/20200401-mxt_kouhou01-000004520_6_1.pdf (アクセス日: 2020年10月2日)